

「支那事変」従軍中に書いた従軍日記『陣中日誌』を読む（上）

A Study on the Titled “Jinchu Nisshi” (Private Diary Written During Military Service) Written by a Soldier who Served in the “China Incident (The Sino-Japanese War)” (part 1)

水 本 浩 典
MIZUMOTO Hironori

はじめに－奥中久壺『陣中日誌』について－

1. 奥中の部隊内での位置づけ
2. 行軍と徴発、指揮班での任務
3. 南京攻略戦
4. 北支戡定戦、そして徐州作戦
5. 野戦病院の日々
6. 駐留と討伐
7. 凱旋（帰国）へ
おわりに

本号（以下、次号）

はじめに－奥中久壺『陣中日誌』について

奈良県立図書情報館に寄贈された自筆従軍日記に、奥中久壺が毎日弛まず書き続けた従軍日記『陣中日誌』がある¹⁾。表紙に、以下のように大書されている（図1参照）。

1) 日中戦争期の従軍日記の調査は、2020年度中国教育部人文社会科学研究 青年基金项目（科研番号：20YJC770044）「侵華戦争時期日軍日記敵搜集、整理与研究」（研究代表者：張煜、研究分担者：水本浩典）を契機に実施している。

その成果として、水本・張「ビゴ－旧蔵『日本清国戦争写真（「日清戦争写真帳」）』所収戦争写真（旅順）について」『人文学部紀要（神戸学院大学）』42号、2022.3。がある。また、張の口頭発表として、「日中戦争における日本軍の「徴発」に関する研究－日本軍兵士が書いた日記を素材に－」東アジア近代史学会、2021.3。「侵华日军日记中的战争书写－以山本武日记为例」中国日语教学研究会江苏分会、2020.10。「侵华日军日记中的华北战场及中国军民的抗战」第七回 鐘山論壇亞太發展年度論壇（南京大学、2021.10）。「以“征发”为名的日军掠夺行为探析－以侵华日军日记为素材－」中国日本史学会2021年年会（2021.8）。「联结“战地”与“枪后”的军事邮件——以新史料上海派遣军宫下磐根“通信集”为例」中国日本史学会2022年年会（2022.11）がある。



図1 奥中自筆本『陣中日誌』6冊
注：奈良県立図書情報館所蔵、筆者撮影

陣中日誌 第一巻
奥中軍曹

第1冊～第3冊、第5冊・第6冊（5冊とも、縦15.5cm、横20.0cm）同じく黒色のハードカバーで表紙と裏表紙を付けている。第4冊（縦15.8cm、横20.0cm）は、大学ノート（表紙に、TEIDAI NOTE とノート名が印刷してあるノート〔表紙下部に、ZENKOKU BRAND MADE BY OKAMOTO NOTE CO. と印刷されている〕のままである）が使われている。

それぞれに綴られているページは、以下の如くである。

第1冊：69丁・図5枚。第2冊：87丁・図3枚。
第3冊：115丁・図12枚。第4冊：67丁・図なし。
第5冊：86丁・図8枚。第6冊：80丁・図2枚。
合計504丁・図30枚。

起筆は、日付けがない半丁ほどの書き出しがある。奥中は次のように書いている。

出勤出来得ない自隊を恨んで遥かなる北支の空を眺め乍ら切齒扼腕して居たのも旬日前の事であったが??待望の大命を拝し、雀躍して準備全く完了?……?……

肉親知人に決別し、一意征途に就く。(中略)

知人よ健になれ

我 征途につく

日付けを冒頭に掲出して日記調で書いている最初は、「9月4日」（昭和12年²⁾）からである。そして、「昭和拾四年八月七日 晴 除隊の日（復員第六日）の日付け書き出しで書いてあるのが、日付けを伴う日記の最終記述になっている。その後、「軍隊生活を回顧す」と題する、2年にわたる中国出征中を回顧した文章が12ページという長文で綴られ、最後に「昭和十四年八月十日 筆を置く（大完）」と、この日記を締めくくっている。

そして、奈良県立図書情報館には、同じく奥中が寄贈したとおぼしき自費出版本『支那事変参戦

2) 本論文では、西暦と和暦を併用し使用すると、あまりに煩雑になるため、基本的に和暦表記にした。昭和12年は、1937年である。

日誌『いくさの場』（以降、『いくさの場』と略す）1冊（B6版、196頁）がある。奈良県立図書館が寄贈受け入れしたのは、1998年である。序文末尾に、奥中本人の自筆で本籍地が記され、最後に、

姓名 奥中久壹

(T. 四. 一. 一九 生)

と書いてある。発行年月日は、平成6（1994）年7月3日とあり、奥中自身による自費出版（タイプ印刷）本であることがわかる。序文末尾の生年月日によれば、大正4（1915）年生まれということになり、奥中が自費出版した時の年齢は、79歳ということなる。奥中は序文のなかで、次のように語っている。

戦後はや五十年、戦争の記憶風化が急速に進み、戦争体験が忘れ去れようとしている時、この日誌がそうした事態の防止に、少しでも役にたたないか。

と、出版に向けた動機について述べ、「ありふれた戦記ですが、降り注ぐ弾雨の中で身命を賭して体験した幾多の真実を、ありのまま書き連ねてあることだけは貴重な資料であると言える」と考え、「戦後生まれの人たちに対する資料の一端として少しでも役に立つならば」と出版を思い立ったと書いている。そして、「雑多な日記文を適宜省略しながら忠実にまとめ」たのが、自費出版本『いくさの場』であると書いている³⁾。

目次では、動員下令、子牙河畔の作戦、江南戦線（南京城攻略戦）、北支戡定戦、徐州作戦、漢口攻略（大別山系）作戦、で途絶している。『陣中日誌』第3冊までが出版されたことがわかる。「後文」によると、奥中は「八十路の寸前」にも関わらず幾多の病魔と闘いながら「約十ヶ月を費やして漸く此所迄書き続けて参りましたが、医者からも執筆の中断を求められており、もうこれ以上は到底無理かと思しますので、戦場での負傷を転機として、一応ペンを休めることに致します」と、途絶の止むなきに至った経緯を述べている。そして、「再びペンを持つ元気が出た時には」残りの3冊分、「戦記の総てをまとめる所存」であると述べているが、後半3冊分の続編は出版されなかったようである。

本稿では、奥中自筆本『陣中日誌』を中心に据え、適宜、奥中の自費出版本『いくさの場』も参照しながら考察していく。

1. 奥中の部隊内での位置づけ

奥中は、どの部隊に所属して出征したのであろうか。参考になるのは、『陣中日誌』第1冊の冒

3) 従って、この『いくさの場』は、奥中本人が原稿を書きタイプ印刷所に出版を依頼した、まさに自費出版本であり原稿の段階や編集過程で他の監修者や出版社の編集者による手直しなどが介在しない点でも貴重な翻刻本といえる。

頭、3ページ下段に本人がデッサンしたとおぼしき色塗りの図柄の中央に斜めに、

北支事変

陣中日記

昭和拾貳年九月起

と書き、左端に、次のように書いてある。

北支派遣中嶋本部隊気付

助川部隊 森井隊 指揮班

奥 中 久 壹

冒頭の「北支那派遣」とは、北支那派遣軍を指す。昭和12年7月盧溝橋事件後第二次上海事変に対応して上海派遣軍が編成され、支那駐屯軍が方面軍として「北支那方面軍」に格上げされる。10月には上海に増援のための第10軍が編成され、上級司令部として上海派遣軍と第10軍を「中支那方面軍」として編成された。

「北支那方面軍」は、第1軍（第6師団・第14師団・第20師団など）と第2軍（第10師団・第16師団・第108師団）及び直属師団として、第5師団・第109師団・支那駐屯混成旅団を擁していた。当時の各部隊は、師団長・旅団長・聯隊長など各部隊の長の名前を部隊名に被せて呼称する習わしであった。「中嶋本部」の「中嶋」を被せた師団は、第2軍に編成された中嶋今朝吾中将（昭和12年8月2日～昭和13年7月15日在任）率いる第16師団である。次の「助川部隊」とは、助川が部隊長を務める部隊という意味である。第16師団で「助川」が部隊長を務める部隊は、奈良に衛戍地を置く歩兵第38聯隊でる。

幸い歩兵第38聯隊については、多くの戦闘詳報が防衛省防衛研究所に所蔵され、ネット公開もされている。歩兵第38聯隊の昭和12年9月22日から9月24日の「東馬村付近戦闘詳報」が掲げる「歩兵第三十八聯隊将校職員表」では、「聯隊長 大佐 助川静三」とあり、「聯隊本部」職員（通信班長、瓦斯係、獣医）、「大隊本部」として第1大隊から第3大隊までの大隊長・副官・主計・軍医が列記され、次に「中隊長」として「1 大尉 奥藤悟一郎」「2 中尉 山田弥一」「3 大尉 森井菊蔵」が列記されている。奥中の『陣中日誌』の記載「森井隊」とは、森井菊蔵を中隊長にいただく第3中隊であったことがわかる⁴⁾。

最後に書かれた「指揮班」とはどのような役割を担うのであろうか。この「指揮班」について、藤原彰が適切な解説をしている。

指揮班 中隊長の下には三ないし四個の小隊があるが、それとは別に指揮運営に必要な直属の

4)「東馬村付近戦闘詳報 昭和12年9月 歩兵第38聯隊」C11111205200 参照。

人員を指揮班として編成していた。戦闘時には命令伝達や情報連絡にあたり、平時には人事、兵器、給養などの事務を分担した。⁵⁾

この第1冊目の冒頭に書かれたスケッチと自筆の記載によって、奥中は、北支那方面軍第2軍として編成された、師団長・中嶋今朝吾中将率いる第16師団の4個聯隊の一つ歩兵第38聯隊の聯隊長・助川静三大佐のもと、森井菊蔵大尉が中隊長を務める第3中隊の指揮班所属であったことがわかる⁶⁾。

奥中の『陣中日誌』は、内地帰還後に製本したとおぼしき黒表紙に、「陣中日誌 第一巻 奥中軍曹」と書いた別紙を糊付けしてある。昭和14年に歩兵第38聯隊が内地帰還した時点では、「軍曹」が軍隊内の階級であったことがわかる。『陣中日誌』第1冊冒頭のスケッチと自筆のタイトルからは奥中の階級はわからない。『陣中日誌』6冊のなかから、奥中自身が自分の階級に言及した箇所を抽出すると、以下のようになる。

- 昨夜から連続不寝番だ。元隊に居た時さへ立たなかつた不寝番に万年上等兵 奥中が連夜の服務とは情ない。(昭和12年10月22日条)
- 本日発令に依り、予備役上等兵二百十一名が歩兵伍長に任官し、(昭和13年8月18日条)
- 同年兵の予備役軍曹への進級命令、本日発令さる。一月一日付で進級したもの、伍長は実に十三ヶ月。僅か六ヶ月で進級する者もある中で、喜んでよいのか、悲しんでよいのか、分らない。(昭和14年2月3日条)

これらの記載から、昭和12年10月段階では上等兵であった。その後、昭和13年8月に伍長に昇進している。そして、昭和14年2月になって軍曹に昇進しているが、伍長から軍曹に昇進するまで「実に十三ヶ月」もかかっている点を、「僅か六ヶ月で昇進する者」も存在していることを指摘して、部隊内での昇進基準が不透明な点に不満を吐露している。

奥中は自分が書いた従軍中の日記にどのような呼称を付けていたのだろうか。上記の『陣中日

5) 藤原彰「注解」(p. XX) 小野賢二・藤原彰・本多勝一編『南京大虐殺を記録した皇軍兵士たち』大月書店、1996所収。藤原は本文中の語句や軍隊符号、略称などについて簡単な注解を行っている。「会報」の意味とそのやり方、陣中日誌や戦闘詳報の意義付け、編制と編成の違い、など、もはや戦後70年以上経過するなかで、従軍中の兵士が書いた日記の記載には、本人や当時の軍隊内では普通に使われていた用語なども的確な理解が難しくなっていることも事実である。その意味からも、藤原の「注解」は参考になる貴重な記述である。また、小林太郎著、笠原十九司、吉田裕編・解説『中国戦線、ある日本人兵士の日記 - 1937年8月～1939年8月侵略と加害の日常 -』新日本出版社、2021においても、本文中に吉田による軍隊用語の簡単な注釈が施してあり参考になる。

6) 第16師団は、中国出征時、歩兵第19旅団(旅団長：草場辰巳少将)のもと、歩兵第9聯隊(京都、聯隊長：片桐護郎大佐)、歩兵第20聯隊(福知山、聯隊長：大野宣明大佐)、歩兵第30旅団(旅団長：佐々木到一少将)のもと、歩兵第33聯隊(津、聯隊長：野田謙吾大佐)、歩兵第38聯隊(奈良、聯隊長：助川静二大佐)が編成され、他に直属部隊として、騎兵第20聯隊、野砲兵第22聯隊、工兵第16聯隊、輜重兵第16聯隊や通信隊、衛生隊、野戦病院など総勢2万5,710名という戦時編成であった。前掲注5) 小林著、p. 46。

誌』第1冊の冒頭には、自ら「陣中日誌」と書いている。しかし、黒表紙で製本した際には「陣中日誌」と書いている。奥中が自己の日記に言及した記述が数か所存在する。

①弾の中で書きなぐった俺の陣中日誌を、先日来只黙々と書き続けて居る。

誰に見せると思はせぬが、俺の心の思ふ俣簡単に綴られて居る。書きかへは不必要だが、江南戦線の降雨の為文字が消へて居る。

何日の日か凱旋した暁、実社会の荒波と戦ふ時、之を見れば何等かの暗示を与へるであろう。(昭和12年12月21日条)

②午後は内地へ手紙を書き、徐州戦当時の日記を綴り直す。(昭和14年1月28日条)

③本夜は数日前から怠けて居た日記帳に向って筆を運ぶ。(昭和14年4月29日条)

このような記述からすると、奥中には自分が書いている日記について確たる名称を考えていたわけではないようである。時には「陣中日誌」と書き、時には単に「日記」と書いたり「日記帳」と書いている⁷⁾。それに対して、『陣中日誌』第1冊冒頭のスケッチとタイトルには、「陣中日記」と書いてある。帰国後のある時期に黒表紙などを付けて装丁をする際「陣中日誌」に統一したのであると考えている。

実際に戦闘を任務とする兵たちとは違い、戦闘時には命令伝達や情報連絡にあたり、平時には事務を分担するという立ち位置にいたことが、奥中の『陣中日誌』をより魅力的な内容を記載してくれることに繋がっている。

つまり、指揮班に配属されたため、奥中は自分が所属する中隊の動向、上部組織である大隊、聯隊、旅団、師団、方面軍の動向も「通報」などで知り得る立場にあった。

そして、その立ち位置が、彼が時々書き残した「国際情勢」などにも触れる機会を持ち得たと考えられる。以下に提示したような記述は、他の従軍日記にはない奥中『陣中日誌』の大きな特色である。

特に、昭和14年、湖北省の北辺に位置する孝感に駐留するなかで矢継ぎ早に内地の政治情勢や世界情勢、そして、ノモンハン事件に言及する記述がある。いずれも、奥中が大隊本部に命令伝達などで出かけた際に耳にし得た情報だろうと推測している。

近衛内閣に変わって平沼男⁸⁾が総裁となり新内閣が生まれた様である(昭和14年1月6日条)

第1次近衛内閣は中国との軍事紛争の長期化に苦慮し、昭和13年1月16日の近衛声明で「国民

7) 前掲の『いくさの場』では、「動員下令」と表示した節見出しには、『陣中日誌』第2冊冒頭のスケッチとタイトルが書かれたデッサンの一部を掲載している。意図的に『陣中日誌』第1冊冒頭のスケッチは採用しなかったようである。その理由は、タイトルに「陣中日記」と書いてある点にあったのではないかと推測している。

8) 平沼騏一郎のこと。平沼は昭和元年に男爵になっている。昭和14年1月第1次近衛内閣の後を受け平沼内閣が発足した。

政府を相手とせず」と表明し自ら停戦への当事者である責任を忌避してしまう。その後、11月3日には戦争目的を「東亜新秩序の建設」と標榜し、再度、国民政府との和平交渉再開を呼びかけるなど迷走を続ける⁹⁾。その後は、水面下で画策していた蒋介石と対立しハノイに脱出していた汪兆銘に期待を寄せる姿勢を見せる。このように迷走した第1次近衛内閣は、ついに昭和14年1月5日総辞職した。奥中は近衛内閣総辞職の次の日には、平沼騏一郎が次期首相になったことも含め伝聞記事ながら正確な日本政治情勢を記録している。驚くべきことに、第1次近衛内閣瓦解のニュースが中国に派遣されている日本軍の下部組織にまで瞬時に伝わっていたことになる。奥中は、歩兵第38聯隊所属の第3大隊本部に命令受領や中隊の連絡担当として両者間を行き来するなかで、大隊本部まで伝えられた正確な情報の一部を見聞き記録したのであろう。

中国国内での政治情勢の変化や重慶空爆についても記録している。

又、蒋介石の隻腕と迄言われたる王精衛は、今回、蒋介石の抗戦を非難するが如き声明を発し、当局者は勿論第三国者に至る迄、一大センセーションを巻き起して居る。（昭和14年1月8日条）

文中の「王精衛」は、「汪兆銘（号が精衛）」のこと。蒋介石の腹心であった汪兆銘が日本軍による政治工作などに呼応すべく、蒋介石に反旗を翻した時期¹⁰⁾の言動を書いた文章である。中国国民党の内部分裂、日本国内における近衛内閣の瓦解など混迷を極める状況のなかでの汪兆銘が発した声明に世界が大きく反応したことを記録している。その記述の数日後、重慶爆撃のニュースを耳にしたことも記録している。

- 軍通のニースに依れば、我陸軍の荒鷲〇〇機は吹雪の朔風を圧して長駆重慶第五次空爆¹¹⁾を敢行し、敵の航空設^(ママ)施を粉碎せしめ、地上の敵は寂として声なく、全機無事航空基地に帰還せるが如し。（昭和14年1月13日条）
- 敵将蒋介石は、国民大会を開催の席上、軍全般に対し攻撃命令を下したるが如く、第一線を承る師団は特に上空に対し警戒を厳にす。（昭和14年1月25日条）
- 軍通のニースに依れば、海軍は大挙して海南島に上陸、同地を占領せるが如し。
友邦独国は之の英断に非常なる讚意を表し^(ママ)仏国は万止むなしと発表しある由なり。（昭和14年2月13日条）

これら奥中が『陣中日誌』に記録した「軍通」情報などは、第16師団の幹部のなかで密かに共

9) 堀真清「東亜新秩序の思想と現実－第1次近衛内閣の3つの声明をめぐって－」『西南学院大学法学論集』25巻2・3合併号、1993.1。

10) 井原沢周「近衛内閣と汪兆銘の重慶脱出」『東洋文化学科年報』4号、1989.11。

11) 重慶爆撃については、戦争と空爆問題研究会編『重慶爆撃とは何だったのか－もうひとつの日中戦争－』高文研、2009。柳澤潤「重慶爆撃－1938～1941日本発の戦略爆撃－」『鵬友』28巻4号、『鵬友』発行委員会、2002.11。参照。

有されていた軍事状況の一端を奥中がたまたま耳にすることが出来たことを『陣中日誌』に書きとめたのであろう。

その他、日本国内の政治情勢以外にもヨーロッパの風雲急を告げる状況を伝聞する機会を得たように、以下のような内容の記述を残している。

①軍通の特報ニュースに依れば、チェツコとハンガリー国境に於て越境から兵変^(膨カ、暴の頭記カ) 彭 発し、両国の軍隊は目下続々として国境に兵力を集結し対峙中なるが如し。(昭和 14 年 1 月 8 日条)

②独逸はチェツコスロバキヤの併合決定を発表す。

先の伊太利の仏国に対する爆弾的要求と共に、第二の世界大戦を呼ぶかの如く風雲急を告げつゝあり。

駐英駐独の独英各大使は既に帰還命令に依り引揚げ、国交断絶せりとも聞く。(昭和 14 年 3 月日条)

いずれも、ヨーロッパにおいてナチスドイツが隣国へ紛争を拡大させヨーロッパの政治情勢が混乱の度を深めている時期の出来事である¹²⁾。中国派遣軍内部で「特報ニュース」として情報が伝達され、それを奥中は、「第二の世界大戦を呼ぶかの如く風雲急」と書いており、第 16 師団の幹部のなかでそのような会話がなされていたことをうかがわせる記述である。

驚くべきことに、ほとんど日本国内においては事件経過は知らされていなかったノモンハン事件¹³⁾についても記録している。以下、『陣中日誌』に記録された関係記述である。

①外蒙に於て戦機愈々熟し、目下砂烟の沙漠に於て交戦中と聞く。(昭和 14 年 6 月 11 日条)

②我警備地境に何の変化なきも、露満国境に於て風雲急益々に急を告げつゝあるが如し。

関東軍司令部発表に依れば、本二十七日払暁、我が空軍は敵機約二〇〇の大編隊とバイカル湖^(ママ)附近に於て遭遇し、約三十分間激裂なる空中戦の後、九十八機を完全に撃墜し、引続き敵空軍根拠地タムスクを空襲。地上に在りし敵機三〇を炎上せしめたり。

12) 1938 年 9 月「ミュンヘン協定」でチェコスロバキアは一部がナチス・ドイツに割譲された。1939 年ナチス・ドイツがポーランドに侵攻する。その機に乗じてハンガリーによるスロバキアとの間で戦争が勃発する(スロバキア・ハンガリー戦争)。奥中の記述は、この時期の中部ヨーロッパの混乱する政治情勢と軍事的衝突の一端を記録していることになる。薩摩秀登『図説チェコとスロヴァキアの歴史』河出書房新社、2021 参照。

13) ノモンハン事件については多くの著作や論文がある。ここでは、秦郁彦『明と暗のノモンハン戦史』PHP 研究所、2014。D. ネディアルコフ・源田孝監訳・解説『ノモンハン航空戦全史』扶養書房出版、2010。今西淳子、ボルジギン・フスレ編著『ノモンハン事件(ハルハ河会戦)70 周年-2009 ウランバートル国際シンポジウム報告論文集-』風響社、2010。田中克彦『ノモンハン戦争-モンゴルと満洲国-』岩波新書、2009。などを挙げておく。筆者も、筆者所蔵関係史料をもとに、拙稿「ノモンハン事件における野戦重砲兵第一連隊第一大隊陣中日誌を読む」及び「ノモンハン事件において『ノロ』高地で戦った歩兵第一連射砲中隊の記録を読む」を用意している。本論文と同じく、ミクロの世界からノモンハン事件の一コマを考察していく予定である。

我三機帰還せずと。（昭和 14 年 6 月 27 日条）

③関東軍司令部発表に依れば、満露国境に於て我空軍と戦火を交へたる敵空軍総数は五百三十数機にして、内二百三十八機を撃墜せしめたるが如し。（昭和 14 年 7 月 1 日条）

④外蒙附近の風雲愈々急を告げ、其の後も度々壮烈なる空中戦を演じ、敵に多大の損害を与へたるも、我損害は僅少との事なり。（昭和 14 年 7 月 4 日条）

⑤去る廿日より満露国境に於て撃墜せし敵機（ママ）の数は約五〇〇を算し、我空軍の威力を遺憾なく發揮しあり。

又、「ハルハ河」対岸には敵なく、只、敗残兵が彷徨するのみありと。

或は大体終局を終けたるならん？（昭和 14 年 7 月 12 日条）

当時、ソ連と満州国の間で国境紛争が多発していた。昭和 13 年 7 月に満州国東部で起こった張鼓峰事件などもその一部である。昭和 14 年になっても両国中の紛争は激増の一途をたどった。このような状況下、関東軍は特設師団であった第 23 師団を紛争地の防衛の任に着けた。第 23 師団の進出はソ連・モンゴル両方の国境紛争が激増する事態になる。このようにして始まったノモンハン事件の経過はソ連・モンゴル両軍と関東軍派遣部隊との全面戦闘に発展する。奥中が「関東軍司令部発表」情報などで知り得た経過は、研究者間で「第 1 次ノモンハン事件」と称される大規模軍事衝突の様を断片的に記録していることになる。特に、ノモンハン上空で繰り広げられたソ連戦闘機と日本戦闘機との空中戦は日本軍側の華々しい勝利に終わった。その状況を「関東軍司令部」は日本側の一大勝利として中国派遣軍の間にも通報していたことがわかる。

満州国・関東軍が主張したハルハ河の線を国境線にすることが戦況のなかでほぼ達成された時期までが、奥中が記録した情報である。以降のソ連戦車隊と日本側の戦車隊の戦車戦の状況や第 23 師団による悲惨極まる地上戦の状況などは、「関東軍司令部」は沈黙を守ったのではなかろうか。奥中の『陣中日誌』では、7 月中旬の時点で「大体終結を終けたるならん」と予測していることを書いているだけである。ただ、末尾に「或は……？」と書いているのは、まことに意味深な言葉である。

7 月中旬から 9 月初旬までの 2 カ月、関東軍・満洲国軍とソ連軍・モンゴル軍は互いに戦車や歩兵・砲兵等を繰り出し、不毛な草原と砂漠で死闘を繰り広げる。そして、最終的にモンゴル人民共和国が主張する清朝期の外蒙古と内蒙古の行政境界線に停戦と国境が定まることになる。奥中は、7 月初旬の時点での関東軍・満洲国軍の一方的な勝利に懐疑的な思いを持っていたのかもしれない。

このようなノモンハン事件の記述などを通じて、中隊に設置された「指揮班」の幹部（当時、奥中の階級は軍曹であり、指揮班のなかで上位の下士官の位置にあった）が様々な軍事情報や政治情勢などにも触れる機会を持っていたことを示す証左にもなる。

2. 行軍と徴発、指揮班での任務

『陣中日誌』前半の 3 冊を通読して得られる感慨は、中国に派遣された日本軍は、正に「歩く軍

隊]であったというものである。中国の果てしなく広大な版図のなかで敵を求めて歩く歩兵第38聯隊の様子は、「歩く軍隊」そのものである。本節では、そのような中国という異郷のなかで敵と遭遇すべく「行軍」する様とその過程での兵士の生き様を「徴発」というキーワードから考察していく。

盧溝橋事件の後、日本軍は戦線を華北にまで拡大する。そういった状況下で第16師団も昭和12年8月31日に戦闘序列が令せられた北支那方面軍¹⁴⁾の第2軍として第10師団・第108師団とともに投入される。

奥中が所属する歩兵第38聯隊は、第16師団隷下の4個聯隊のひとつとなって、華北戦線に出発する。『陣中日誌』第1冊冒頭は中国へ出発した状況をまとめて書いている。そして、日付けを付けた日記としての書き出しは9月4日から書き続けられるようになる。そのため動員下令が発せられたのが何時か記載がないのでわからない。幸い、第8中隊の陣中日誌（但し、抄録）が刊行されているので、動員下令の様子がわかる。

昭和十二年八月二十五日奈良歩兵第三十八連隊ニ第五動員令下り、充員召集令、発令セラル。

八月二十六日 晴

動員第一日動員編成準備

陸軍歩兵中尉福島忠弘第八中隊長編成担当官トシテ奈良市北市町ニ中隊本部ヲ設ク。午後四時動員会報実施セラル。¹⁵⁾

これによって歩兵第38聯隊の動員下令の発令日が8月25日であったことがわかる。同じく第16師団隷下の歩兵第9聯隊では「12.8.24 午後11日20分第5動員第1号下令せられる。」と小林太郎『日支事変従軍日記』は書いており、「12.8.26 本日動員第1日と決定す。」とある¹⁶⁾。

9月4日には屯営を出発、大阪で出征第1日目の宿泊をしている。9月7日に「御用船綾葉丸に乗艦」し一路天津に向かう。徒歩と汽車を使って津浦線の独流鎮からいよいよ河北省の平津（北平と天津を含む地域）地方南部における残敵掃蕩に向けた行軍が始まる。

奥中は9月8日～12日までをまとめて書いた後に1頁を使って「子牙河畔戦」と斜めに大書し色鉛筆で兵隊2名と中国の家屋を描いたデッサンをあしらっている。以後、奥中の所属する第3中隊は行軍と中国軍との戦闘を交互に繰り返しながら河北省を南下していく。

『陣中日誌』のなかで独流鎮からの行軍を開始する冒頭に次のように書いている。

14) この時期の日中戦争期をまとめたものに『北支の治安戦1』（防衛庁防衛研修所戦史叢書1）朝雲新聞社、1968がある。しかし、個々の師団の戦闘状況などを記述するというより、日中間の政治・国際情勢及び日本軍・中国軍の動向をまとめたものであり、第16師団の動きについては具体的には書かれていない。

15) 阪本正夫・幸脇藤喜雄・中尾勝次郎編『支那事変陣中日誌－奈良歩兵第三十八聯隊助川部隊 第二大隊 第中隊・水谷大隊 福島隊』出版社不明、1967カ（推定）p.9。本稿では、奈良県立図書館所蔵本を参照した。

16) 前掲注5）小林太郎『日支事変従軍日記』は、原本に貼付されている写真・資料を省略し本文だけが翻刻されている。P.30。歩兵第20聯隊の東史郎の従軍日記『東史郎日記』（熊本出版文化会館、2001）では、「八月二十六日午前七時、召集令状を受け取る」p.21と書いている。

正午、独流鎮に於て昼食をする。対敵第一日から粟飯だ。馬鈴薯だ。空腹を感じ乍らも咽喉が通らぬ。（昭和12年9月16日条）¹⁷⁾

行軍2日には、次のように書いている。

愈々前線に近づいて来た。遠くの方で大地をゆすぶる様な大砲が聞へ、何となく我々の心を引立て、呉れる。

路側には敵兵の死体・軍馬が殖れて、死臭鼻を突く。咽喉がかわく…………

水筒には水がない。湿地の水を飲めば、直ぐに病魔に襲れる。頼りにして居た清水器もこわれてしまった。あゝ…………（昭和12年9月17日条）

天津上陸後（9月14日）たった3日目の記事としてはあまりに悲惨な状況での行軍開始の様を書いている。歩兵第38聯隊が出征するに際しては十分な装備をしたと想像されるが、『陣中日誌』に記す行軍の様子は行軍2日にして疲弊して前途を悲観するような記述になっている。果たして、次の日の記事では、

雨が降って来た。其の上、昨日の砲声は銃声と変り、近く二千米位の所に敵兵が見える。雨で濡れた体を休める場所も無く、寒けと戦い乍ら堤防上で露営だ。然も糧食はなく、芋を堀り、ナンバ¹⁸⁾を其の儘かじって腹の虫を押し乍ら、雨にたゝかれて一夜を明す。（昭和12年9月18日条）

中国軍は後退する際、道路を壊して日本軍の進撃を阻止するような破壊工作を行っていたため、歩兵第38聯隊も思うように行軍ができない状態になってしまう。そのため路上で雨中露営を余儀なくされる。「然も糧食はなく、芋を堀り、ナンバを其の儘かじって腹の虫を押し乍ら」の惨めな露営第2日であった。

本来、部隊の後方から大行李¹⁹⁾が兵隊用の糧秣を運搬して糧秣支給をするのが通常に行軍仕様のはずである。しかし、奥中が所属する第1大隊第3中隊には大行李が糧秣を運搬してくれていない状態での露営だったことがわかる。そのため「芋を堀り、ナンバを其の儘かじって」空腹に耐えた

17) 『いくさの場』では、同じような文章が8月15日の記事のなかに見える。8月16日から18日の記事を9月15日条にまとめて記載している。次の日付けは9月19日から始まっている。『いくさの場』ではしばしばこのような圧縮や削除が行われている。出版の紙幅を考慮した措置と考えられる。

18) 「ナンバ」は、関西圏で広く使われる方言で「トウモロコシ」のこと。『日本国語大辞典』第2版（小学館、2001）第2巻、p.349。

19) 藤原は前掲5の『南京大虐殺を記録した皇軍兵士たち』に所載する「注釈」のなかで、大行李・小行李について、次のように注釈している。

歩兵大隊以上の部隊で、必要な荷物を運ぶ部隊のことを行李という。そのうち、直接戦闘に必要な弾薬や資材を運ぶ部隊を小行李といい、直接戦闘に関係のない糧秣や資材を運ぶ部隊を大行李といった。それぞれが、聯隊本部、大隊本部に所属していた。（pp.xx・xxi）

のである。

以降、随所で食糧を現地で調達する行為が記載されている。日本軍は中国という外国に部隊を派遣しての軍事行動であり、「徴発は」中国国内の民衆、特に農民から見れば略奪である。しかし、奥中は行軍中に農民が植えた畑から「芋」や「ナンバ」を盗る行為について何ら後ろめたさや不法行為であるといった認識を持っていないように感じられる²⁰⁾。日本国内における演習などでは、絶対にやらない行為のはずであるが、中国では簡単に行えたという意識の落差に驚くほかない。

小林太郎『日支事変従軍日記』のなかでも、「行軍中いもを畠から掘つて来て、焼いもを持って行く」（昭和12年9月25日条、前掲注5）著、p.37）とあり、歩兵第9聯隊でも普通に中国農民の畑から掠奪していたと書かれている。同じく第16師団輜重兵第16聯隊に入隊して中国戦線で輜重兵として任務に就いていた小原孝太郎の従軍日記でも同じような記載がある。

所々村落に近き所には畑ありて野菜（大根、葱、タバコ）など作りあるを見る。班長の命で菜ッパ一束ずつ持参しなければ夕飯たべさせないぞと怒鳴ったので、皆敵陣に飛び込むやうな元氣で大根の首を引抜いた。（中略）夜の十一時頃一寒村につく。野営なり。天幕をはり炭をおこして暖をとり、廻りの畑より甘薯、王モロコシを取り来て焼きにて食ふ。（以下略）²¹⁾（昭和12年9月26日条）

第16師団所属の各聯隊の兵士たちは、華北戦線に投入された直後から中国農家の作物を盗んで自分たちの食料としていたことがわかる。

このように糧秣の不足から餓えに苦しみながらの行軍中、最初の不祥事を『陣中日誌』は記録している。それは、歩兵第38聯隊と歩兵第33聯隊との同士討ちであった。独流鎮から行軍を開始して4日目のことであった。

（前略）東辛庄に至り村落露營す。本日当地の守備を歩三十三聯隊と交代し彼等に戦場の話を聞く。

三十三聯隊では早相当の犠牲者を出した様だ。（中略）

夜間俄かに激しく聞へる銃声。すは敵襲？？と銃執りて立上ったが、程なく銃声は下火となった。後で聞けば三十三聯隊と我第二大隊との同志討の様だ。（昭和12年9月19日条）²²⁾

20) 江戸時代から村のルールとして作物を盗まない取り決めを定めている場合も多い。前田正治『日本近世村法の研究 附録 村法集』有斐閣、1950が江戸期の村法研究の濫觴として夙に有名である。このように日本では畠などの作物（生り物）を盗まないという慣行は広く存在していた。奥中が育った当時の山辺郡朝和村でもそのような慣行は村民に浸みわたっていたはずである。

21) 小原孝太郎の従軍日記は昭和12年9月1日に入隊し昭和14年8月7日に帰還・除隊する前日まで毎日書いた日記であり、全11冊。後、江口圭一・芝原拓自編『日中戦争従軍記－輜重兵の戦争体験－』法律文化社、1989として翻刻されている。当該記事、p.33。

22) 『いくさの場』同日条では、これらの文章は削除している。P.9。

東辛庄に露營し、歩兵第33聯隊に代わって守備に就いた歩兵第38聯隊第2大隊と歩兵第33聯隊とが「敵襲」と勘違いしたのか、同士討ちの状況が出現したのである。歩兵第33聯隊では、この日、初めて中国軍との戦闘を行い、「相当の犠牲者を出」す事態になっていた。そのため露營中の兵士も多分に神経過敏になっていたことも推測される。残念ながら防衛研究所所蔵の歩兵第38聯隊関連の戦闘詳報には9月19日の情報を見出すことができない²³⁾。

残念ながら小林太郎『日支事変従軍日記』では小林は独流鎮に滞在中であったが、このような同士討ちの風聞は記録していない。小原幸太郎の『日中戦争従軍日記』も同様に記載がない。唯一、『東史郎日記』に同様の不祥事があったことを類推させる記述が存在している。9月22日の激しい戦闘を追憶する長い文章のなかに、次のように書かれた箇所がある。

（前略）夜九時頃、機銃が気狂いのように鳴りだして、弾が背後の壁に痛い音をたてて無数につきささった。

我々はバネ仕掛けのように立ち上がったが、中隊長も小隊長もおらず指揮する者がなかった。第一分隊は前方、第二分隊は右方、第三分隊は後方というふうに申し合わせて敵襲に備えた。

「同士討ちかも知れないぞ」と、誰かが絶叫した。

桃馬頭における三十三聯隊・三十八聯隊の同士射ちが我々の頭によほど浸みこんでいたのである。（後略）²⁴⁾

第16師団第20聯隊所属の東が生々しく夜襲に遭遇した有様を記述するなかに、「三十三聯隊・三十八聯隊の同士射ち」が頭をよぎったと書いている。第16師団は歩兵第19旅団と第30旅団の2つの旅団によって編成されており、第30旅団内の「同士討ち」が併設の旅団内にも風聞として広まっていたことが想像される。

行軍開始から10日目にあたる9月26日に、奥中が所属する第3中隊は初めての激戦を経験する。奥中は当日の記事の日付けの後に「砂河橋の激戦」と書いている。

九月二十六日（砂河橋の激戦）

午前六時念祖橋を出発。第三中隊は突兵。戦気益々高く悠々と前進を続ける時、突如、不気味な音を立て、迫撃砲の洗礼だ。其の破片、我鉄帽に当るも幸負傷なし。迫撃砲弾で戦闘の幕は落され、両軍共、必死の戦闘を交へる事、実に六時間。其の間あらゆる危害を無視して中隊と連絡する事数度！！

日頃鍛へた軍人精神を発揮する時は、此の時と一死報国の一念に燃へた兵の顔々の物すごさ

23) 確認できる歩兵第38聯隊関連の戦闘詳報は、「東馬村附近戦闘詳報 昭和12年9月」（請求番号：C11111205200）以降のものである。穿った見方をすれば、「同士討ち」は報告すべき戦闘の範疇には入らなかったであろう。

24) 前掲注16) 東著 pp.57・58。

—。

突撃の際は俺も第三小隊長田嶋准尉と共に真先に敵陣に突入した。

其の直前、田嶋准尉の決意の口許が動いて「煙草を持って居る者は一服喫め」。敵前五十米、何と言ふ立派な言葉ぞ。緊張した勇士の顔も忽ち破顔一笑。昨日支給された「光」を出して、喫み合ふ。一本喫む間もなく「煙草止め」。続いて、「突撃に進め!!」。忽ち緊張する兵の顔??白穂の銃剣堅く握りしめ、敵陣目かけて真しぐら……方、一線は占領した。続いて二線三線逃げる敵を追撃だ。軽機の射撃と共に真先に塹壕に飛び込んだ俺は、無意識の内に三名の敵兵を銃剣で殪して居た。

貝田曹長も単身血の滴る軍刀を振りかざして、片端からなぎ倒して行く。

今迄つもりへった恨みを、一時に晴らして、胸がすっとする。此の戦闘に於て第三中隊は一躍勇名を揚げたが、其の為九名の負傷者を出す。其の中には同班で只一人の上等兵斎藤藤弥も交つて居た。然し、他中隊に比して少ないは不幸中の幸であった。²⁵⁾ (昭和12年9月26日条)

このように奥中自身も体験した実戦を生々しく書き綴っている。そして、自ら敵兵を3名銃剣で殺したことを書き留めている。これは戦闘における攻撃の結果であるが、行軍を始めた直後の9月19日には、「本日敗残兵数名をとらへ我腕を試す。」と書いており、歩兵第38聯隊では敗残兵を捕虜にした場合、戦場で度胸を付けるために捕虜を殺すことも行っていたことがわかる。このような中国軍敗残兵に対する行為については、第6節において詳述したい。

上述したように、歩兵第38聯隊所属の部隊は糧食の欠乏に悩まされ近隣の農家の作物を盗んで空腹を満たしている。このような「盗み」を「徴発」と表現する記述は、昭和12年9月28日条が初出である。

九月二十八日 康寧屯から追撃したが部落で露営中

朝から糧食の徴発に出かけたので、昼食は久し振りに鶏と野菜を煮て美味しく。

掃蕩のため行軍中に露営した村で「朝から糧食の徴発」を行い、鶏や野菜を奪って食糧にしている。奥中は「美味しく」と表現し、「徴発」行為をまったく罪悪感なく記述している。このような「徴発」行為は、「糧食がない」(昭和12年9月29日条)ことに起因していることを書き残している。

25) 『いくさの場』でも、ほぼ同じ内容を表現を現代風に書き改めて翻刻している。pp.13~15。『いくさの場』では、「向って来た敵兵の胸を刺し、返す銃床で頭部を一撃、忽ち二名の敵を殪していた」とより具体的に書いている。そして「貝田曹長」を「田嶋准尉」に変更し、その後に「こうして第一戦は占領した。続く第二の敵陣も先を競って突撃を敢行、敗走の敵を刺し続け完全に壊滅した。」と書き足している。また、「敵血の滴る銃剣を抱えて意気揚々と引き揚げて来る時、我武勇を誇る言語に絶する嬉しさと共に、胸中に累積していた総てを一拳に吹飛した喜びも又格別である。」と改変している。『陣中日誌』では、「三名の敵兵を銃剣で殪したことで、「今迄つもりへった恨みを、一時に晴らして、胸がすっとする。」と奥中個人の感情を吐露している部分を、『いくさの場』では、敵兵に対する「恨み」という表現を避けて「胸中に累積していた総て」と書いて、翻刻に際して付度した表現に改変している。

同じ第16師団・輜重兵第16聯隊所属の輜重兵特務兵として奥中と同じように中国平津地方における作戦に従事する第16師団に糧秣を運搬することが任務であった小原幸太郎は、応召した時点では小学校教員で28歳であった。9月26日に、「廻りの畑より甘藷、王モロコシを取り来て焼きにて食う」とあるのが、農作物を盗って食料にしたことがわかる最初である。9月20日に中国に上陸して糧秣運搬を開始してわずか6日目のことになる。

このような農作物を盗って食べる行為を、9月29日条では、

厩当番の時など、畑で甘藷を徴発して来て焼いて食べると甘味しい。日本のそれ程ではないが。²⁶⁾

と、農作物を「盗る」行為を、「徴発」と表現している。この記事が小原幸太郎の従軍日記『日中戦争従軍日記』に見える「徴発」の初出である。

10月1日の記事によれば、このような「徴発」行為は、何人かが集団で行っていたこともわかる。

徴発組は鉄砲をもって驢馬にのり出掛けて、鶏、ネギ、菜、ランプ、鏡、鋸を徴発して意気揚々と引上げたり。出征以来、センギリ、干鱈、カンズメ、牛肉などばかり食べて青物は少しも食べない。こんな野菜を食べないと^(ママ)營養が偏して病気になるはしないかと心配だ。

この後、続けて、次のような内省を込めた記述が続く。

此の平和な農民たちは恐らくどんな気持だろうか。生れて何年か、匪賊の襲撃にでも逢った外でなければこんな惨禍に逢ったことはなかろう。(中略) 戦争の為一朝にして平和は破れ家をすてて放浪の旅に出、いづれの日か家に帰るであろう。その日、此の荒れ果てた故郷の廢家は彼等の心に如何なる痛手をあたへる事だろうか。(中略) 自分等が村をはなれた漂浪しなければならぬ運命に立至った時の事を考へてみよ。戦争ほど残酷なものはないと思ふ。(中略) 斯様な憂目にあつた農民たちは、今後日本に如何なる印象を持って行く事だろう。出来るだけ悪くない印象を残して行きたいものである。²⁷⁾

しかし、小原の『日中戦争従軍日記』には、それ以降も連日、徴発を行なったことが記されている。そして、上記のような感慨を記した箇所はない。徴発に明け暮れる日々、徴発される側の痛みに鈍感になっていったようである。

『陣中日誌』では、なぜ行軍中の部隊に糧食が十分に提供されないのかという点について不満や疑問を呈する記述はない。糧食が欠乏しているから「徴発」をする。行軍途中の部落で食べること

26) 前掲21) 著、p.35。

27) 以上の記載は、前掲注21) 著、p.39。

ができる物を「徴発」し、それらで空腹を満たして、また、行軍する。農家で大切に飼育している牛を屠殺し主食とした記述（昭和12年9月30日条）や、「出発以来糧食欠乏に備えて少しづつ米の量を少くして居る故、食事した直後でも空腹を感じる事が毎毎である。」（昭和12年10月10日条）を経て、10月13日には、「本日から糧秣がない」と書き、困惑しながら、追撃のための行軍を続け、「腹はへる食はない。其の辺の大根茄子ネギ等々あらゆる物を其ノ俣かじって空腹をおさへ」ながら目的地の北馬村に到着した後に食べた「粟粥」を「今日程美味しく食った事はない」と書いている。

その後、第3中隊は、10月18日になってやっと糧秣が支給された。

唐山に於て煙草三ケと桜餅と共に糧秣が支給された。

奥中が所属する第3中隊は、10月21日からは進駐した寧晋で警備中隊となっている。そして、10日後には第16師団が第2次上海事変応援部隊として中支那方面軍に投入されることになり、石家荘から汽車で天津に向かうことになる。

この約1カ月半ほどの平津地方における残敵掃蕩戦のなかで、指揮班に所属する奥中はどのような任務に就いていたのであろうか。

9月22日条で「今日は中隊は第一線、毎日〽️同じ様な戦闘を繰返して居る」と書き、翌日23日には「朝霧について気持ち良く行軍して居る時突如??四辺の静けさを破って豆をいる様な銃声……飛び来る銃弾 隊長の勇ましい命令」、「第三中隊右方一線 中隊は弾雨の中を躍進す」と書いた後、

俺は雨の敵弾を冒して約三料離れた大隊本部へ連絡に走る事、実に四度。

と書いている。戦闘状態に入った中隊の情報を3km離れた位置にいる大隊本部まで伝達する任務を4回も行ったとしている。その間、「ナツメのあるのを見付けて、木に登り空腹を満たして居ると」第4中隊の小隊長から叱責を受けた。最後の「其の時、既に足許には第四中隊の兵が散開して射撃をして居るではないか。何と呑気な事よ……」とおどけている。

奥中は、指揮班のなかでも大隊本部との連絡任務を担っていたようである。戦闘中に何度も大隊本部との間を往復している記述は、以後、たびたび出てくる（9月26日、10月1日、10月9日、10月21日、10月23日、10月24日、10月26日など）。

中隊から派遣される各中隊の指揮班の兵は、大隊本部で寝食を共にすることもあったようで、「毎日午前中は本部で暮し」（10月24日条）、時に「食事等全部共同作業」（10月2日条）し、「大隊本部での生活も嫌になって来た。早く第一線に出て戦闘をしたい……」（10月4日条）とも書いている。そして、暇を見つけては「命令の整理」も行っている（10月16日条、10月23日条）。

時には、自転車を使って連絡任務を行っている（10月23日条）。別の日には馬に乗って行き来したとも書いている。

今日は自転車がないので、支那馬にのり、本部へ行く。初めての事故、具合が悪い。
馬で行くと、馬糧を与えなければならない。
俺の供は自転車に限る。（昭和12年10月27日条）

そのような任務を続けるなかで、11月1日の記述では、

午前〇時、仮眠の夢を破られて、大隊本部へ連絡に行き、何故か酒色満面の某幹部に意外の事に付いて叱られた。

残念だ?? 然し相手は上官?

とある。大隊本部の要員のなかには酒癖の悪い者もいたようで、奥中はその理不尽な叱責にグッと我慢したことを記録している。後にも言及するが、部隊の兵隊が一様に優秀で品行方正な者ばかりではなかったことを暗示するような記述を残している。

歩兵第38聯隊を含め、第16師団はこの後、命令により急遽中支那方面軍に投入され、南京攻略戦の一翼を担うことになる。

3. 南京攻略戦

第16師団は、石家荘から汽車で天津まで運ばれ、頑強に抵抗する中国軍に苦戦する中支那方面軍に追加投入される。上海附近の戦況を打開すべく第6師団・第18師団・第114師団などで編成された第10軍をもって杭州湾上陸作戦が実施される。中国軍の背後を襲うことを企図した作戦であった。このような状況下で北支から転用された第16師団は、11月13日揚子江（現在は長江と呼称）の白茆口付近に上陸を敢行し19日には常熟を占領した。以降、なし崩し的に軍上層部も追認した南京攻略戦に参加し、12月13日に組織的抵抗が止む南京城を攻略し占領する²⁸⁾。その間、200km以上の道程を中国軍の防衛線を突破しながら一瀉千里の如く南京目指して前進する（図2参照）。約1カ月間の南京攻略戦の状況を奥中の『陣中日誌』ではどのように記録しているのかを見ていく。

奥中自筆の『陣中日誌』第1冊表紙裏に、セロハンテープ²⁹⁾で止められたメモがある。そのメモには次のように書かれている。

28) 中支那方面軍の動向及び南京攻略にむけた軍の動きは、防衛庁防衛研修所戦史部『支那事変陸軍作戦（1）-昭和十三年一月まで-』朝雲新聞社、1975、「第三章 北支事変から支那事変への拡大」に詳しい。南京攻略作戦の概要を知るには最も適した本といえる。但し、各師団などの具体的な動向や戦況などはほとんど書かれていない。

29) 1930年にアメリカで考案されたセロハン粘着テープは、戦後、日緋工業（現在の社名は、ニチバン）によって改良が重ねられ、セロテープという商標名が一般化するほどに流布している。日本国内でのセロハンテープの普及状況を勘案すると、戦後だいたい時間を経過した後に書いたメモを貼り付けたと推測される。

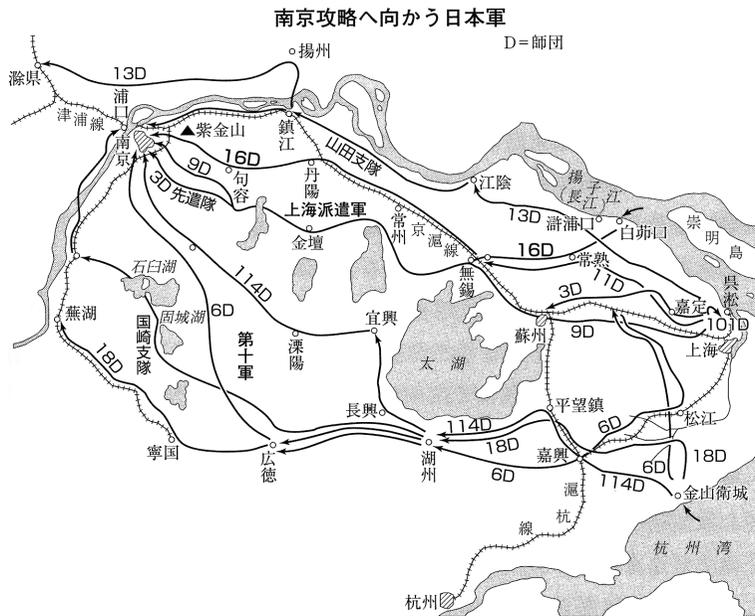


図2 南京攻略を目指す日本軍

注：前掲注5) 小林著、p.91に掲載する図を転載。なお、この図のもとになったのは、前掲注21) 著、p.417の「南京攻略作戦経過要図」と考えられる。

陣中日誌草稿

自 昭和十二年九月四日
至 昭和十四年八月十日
の二ヶ年に亘り戦場に於ける各種行動を、一日も欠かすことなく弾雨の中で書き連ねたのが、この草稿六冊であります。

部隊凱旋の折、所持品の検査が厳しく、各人の私物品の総てが、憲兵の嚴重な検査の対象となりました。

この草稿には陣中日誌の資料である戦闘詳報の一部や、戦闘経過要図の殆どが含まれ、軍規上は絶対許さるべきではありません。そこで何日もの様に六冊の草稿全部を公用行李に収め、「陣中日誌資料奥中軍曹担当」と大書して受験し、無事この難関を突破しました。

又南京城内の掃蕩作戦中、敵の将校と「一対一」の決闘をし、彼を刺して取得した支那軍の短剣一振り、事変の記念品として持帰りたいが、完全な「武器」である為それは許されず、玄界灘に涙と共に放棄致しました

要するに、奥中は6冊の『陣中日誌』の位置づけを「陣中日誌草稿」だとし、戦場の真っ只中で書き続けたこと。日本へ凱旋する際、所持品検査で没収されるかと思ひハラハラしたこと。南京での掃蕩戦のなかで敵の将校と一騎打ちの戦いをし戦利品の短剣を得たが、帰国途中で海に投棄したこと、を書き連ねている。

吉田裕は、軍は復員す時に兵が様々な物品（例えば「輸入禁制品」、「危険物件（鉄砲火薬類取締法に触るもの）」、「掠奪不正品と判定し得るもの」を嚴重に日本への持ち込みを規制しようとし

たことを、指摘している³⁰⁾。しかし小林太郎が『日支事変従軍日記』で復員途中を記録した昭和14年8月7日の記載では、

14. 8. 7

身体の消毒、被服、兵器の消毒終り、憲兵税関の検査終る。

と、憲兵立会いの私物品に対する税関検査については1行で済ませている。

満州事変に出征し復員まで詳細な従軍日記（全8冊、筆者所蔵）を書いた歩兵第五十九聯隊所属の岡本覚次郎（復員時、中隊長）が復員時に税関検査の状況を書いた部分がある。

后二時半頃より税関検査ありしも余の行李は開梱もせず通過す煙草若干多き是ありしも其ま、通過せりおとなしい官吏にて幸せたり 心配した税関何のこともなしあけられし者一名もなかりき（昭和8年11月11日条）

岡本の中隊全員がすべて問題なく通過したとある。岡本も通関検査を内心心配している様子が読み取れるが、「おとなしい官吏」だったため幸運だったようである。

日中戦争中の従軍日記のなかで、出征から復員まで書き続けた従軍日記を数多く当たったわけではないので、何とも言えないが、少なくとも奥中が復員する際の税関検査はあまり嚴重なものではなかった。

『陣中日誌』の記載の方が詳しく書いてあるが、奥中も「憲兵及税関吏の検査を受けるも甚だ簡単なり」と書いて、あまり嚴重な物品検査はされなかったようである。そう考えると、『陣中日誌』第1冊表紙裏に貼付されたメモ資料の記載とは齟齬があることがわかる。奥中の記憶違いか後の情報が付加されているのではないかと考えられる。

また、7月20日に復員のため上海から御用船に乗船し黄海・玄界灘と航行し、26日に検疫所のある似島に到着する間の記述にも、短剣を海に投じたというような記載はない。

『陣中日誌』第1冊表紙裏のメモ資料には、後半、掃蕩戦の最中敵将校と「一対一」の決闘をした戦利品だった短剣を復員途中の船中で投棄したことを書いている。このエピソードと呼応する文章を、『いくさの場』12月14日の記述のなかに見い出すことができる。

十二月十四日（中略）

本朝、指揮班の兵に対して掃蕩中の単独行動を禁じ、必ず二名以上で行動する様に指示した俺が、本部との連絡の為只一人で歩を進んで来ると、疎な建物の十字路で一人の支那人とばったりと出会った。民衣をまとうてはいるが大きな青龍刀を背にした姿は、誰の目にも立派な軍人である。俺を見ると同時に刀を抜き放って走り寄って来た。睨み合う間もなく、彼の青龍刀

30) 前掲注5) 小林著、吉田裕による「あとがき」p.319。

が、俺の頭上を叩くのを振り払った我銃剣は、彼の心臓を見事に貫いていた。「殺った!」「勝ったぞ!」心の中で大きく叫び乍ら、倒れている哀れな彼に対し心の片隅で何となく手を合わせていた。倒した彼の所持品を調べると、軍官学校（士官学校）卒業時の優等生を示す短刀一振りのみで、他に何の持物もない。戦いに敗れ、敵兵である俺との相討ちを計ったのであろう。彼の心中察するに余りある。（以下略）³¹⁾

当該記事を『陣中日誌』で探してみたが、見当たらない。12月14日条は、次のように書かれている。

十二月十四日

Rは午前八時集結し各部隊と共に城内の敗敵を掃蕩すべく城内中山路の十字路に至り待機し中昼後掃蕩を開始する

城内の家屋には至る所敗残兵あれ共今は全く戦意なく我軍門に降る者多し

四億の民衆の首都南京も終に我手に占領されたが近代建築物が軒を並べアスファルトを敷きつめた道路上には敵の敗退を示すかの様に兵器被服あらゆる物品が足の踏む所もない迄に四散し其の間に敵の死体累々として折重り目も当てられぬ様な惨状だ

高射砲機関砲等が天空を擬して置去りにしてありあらゆる兵器が打壊かれて四散して居るのもまた一人の哀を感じる

午後四時予定の如く掃蕩終り和平門に引上げて休憩の後、昨日の宿舎下関に向ひ昨夜と同じく露営す

我海軍の勇士等とも続々として上陸をし四面には喜色溢れて居る

と書かれてあり、奥中と敵兵との一騎討ちのエピソードは全く見い出せない。奥中が自費出版本の原稿作成の際に「記憶」を当該条に書き足したのであろうか。『いくさの場』当該条には最後に、次のような文章で締め括られている。

某部隊に配属されていた工兵中隊長が得意満面、「部隊長殿、我隊は百余名の敵を捕虜にしました」と言上すると、隊長は膠もなく「捕虜を養う食糧があるなら犬でも飼へ」と、直下に申されたとか、中隊長は敵兵を江岸に連行して射殺を命ぜられるが、兵の中には「弾丸が勿体ない」と携行の工具を用いて、撲殺したとのことを耳にするが真偽は定かではない。

この文章も、『いくさの場』にあって、『陣中日誌』では見出すことができない。奥中の「記憶」を書きとめたものであろうか。

奥中は、『いくさの場』を出版するにあたって、「序文」のなかで次のように書いている。

31) 『いくさの場』p.55。

入隊以前から日記をつけていた私は、従軍中も筆記が主体の任務を命じられたため戦場においても一日も欠かすことなく、眼で視、耳で聴き、心に感じた事柄をありのまま書き綴り、昭和十四年八月に除隊する時には、『軍事用記録帳』六冊にぎっしりと書き込まれてありました。（中略）

ありふれた戦記ですが、降り注ぐ弾雨の中で身命を^(犠牲)堵して体験した幾多の真実を、ありのまま書き連ねてあることだけは貴重な資料と言えるのではないのでしょうか。³²⁾

また、奥中は序文のなかで、「雑多な日記文を適宜省略しながら忠実にまとめ」と書いてあり、この序文を読む限り『いくさの場』の典拠になった自己の従軍日記である『陣中日誌』を「適宜省略」こそすれ、「忠実にまとめ」とあるが、原稿作成の過程で奥中の「記憶」を加筆した部分もあることを指摘できる³³⁾。

奥中は、自分が従軍中に書き綴った『陣中日誌』第1冊表紙裏にメモを貼り付けて、『陣中日誌』を「陣中日誌草稿」と表記し、出版を企図した従軍日記（自費出版本のタイトルは「いくさの場」と題している）のための「草稿」と位置づけている。そして、『陣中日誌』の文中には、随所にエンピツ書きで「草稿」の文章を加筆・訂正している箇所もある。このように従軍中に書き綴った従軍日記とそれをもとに戦後になって出版を企図して原稿化する過程のなかで、様々な記憶などが混入していくことを証する資料でもある。

上述のように平津地方南部における残敵掃蕩戦に投入された歩兵第38聯隊所属の部隊は、兵站からの糧食支給が滞ったために、空腹を満たす必要上「徴発」を行っていた。では、南京攻略戦に転戦してからの奥中たちの部隊の「徴発」記事を見ると、様相が相当違っているように感じられる。昭和12年11月28日無錫まで進軍した奥中は、次のように書いている。

午前八時現在地に滞在を予想して、新たに設営をする。弾薬及糧秣を受領して、正午頃やうやく宿舎に入れば、後方から火災だ。装具を出すやら消火やらで元隊の非常呼集か火災呼集の様なさわぎ。（中略）

無錫の街も爆撃で無惨に破壊されて居るが、以前は立派な街で奈良市以上だろう。一段落ついてやれ〜と思へばどうやら明日は出発らしい。今日、徴発に行ってソーダ水蜜柑水エビ南

32) 『いくさの場』序文。

33) 成田龍一『増補「戦争体験」の戦後史—語られた体験／証言／記憶—』（岩波現代文庫）、岩波書店、2020、第3章「証言」としての戦争（1965-1990）の「I 書き換えられる『戦記』」において、吉田満の『戦艦大和の最後』が計8度も書き換えられたことを指摘し、「戦記は書き換えられる」と指摘している。そして、成田は次のように類型化している。

戦記の書き換えに際しては、一編一編の戦記ごとに個別の理由が見られるが、1970年前後の書き換えには、すでに刊行されていた戦記の叙述の集成（α型）と、これまでの戦記が作り出してきた文脈に対するあらたな文脈と認識を提示（β型）との二つの形がある。それぞれは、さらに二つのタイプに分けることができ、α型には、強調点をずらしていく書き換えと、強調点をさらに拡大するものがみられる。また、β型には文脈を無化する方向で修正するものと、批判的に書き換えるものとの二つの方向性がある（p.170）。としている。奥中が自費出版本のために作成した原稿に原本である『陣中日誌』に加筆した箇所が存在していることが、成田の類型化したどれに該当するかは定かにできていない。

京豆栗等々沢山あったので、毎日の間食に楽しみにし、又、寧晋の様にメリケン粉料理を造つてと思つて居るのに出発とは余りに情ない。(中略)

今夜は俄造りの寝台の上で、徴発した夜具及毛革の外套で温く寝ようと思つて居たが、命令に次ぐ連絡で横になる間もなく夜が明けて来た。(昭和12月11月28日条)

無錫に入った奥中たちはここで「弾薬及糧秣を受領して」いる。慌ただししい状況のなかで「無錫の街」に徴発に出かけ、「ソーダ水蜜柑水エビ南京豆栗等々沢山」徴発し、「毎日の間食に楽しみにし、又、寧晋の様にメリケン粉料理を造つてと思つたことを書き留めている。いずれも、糧秣にはない「ソーダ水・蜜柑水・エビ・南京豆・栗」といった嗜好品や副食品などを徴発してきて、これから楽しく美味しい食事にありつけると喜んでいる様子が書かれ、「夜具及毛革の外套」も徴発し安眠を期待したとある。

無錫における「徴発」は糧秣の支給が遅れ餓えに耐えられずに徴発行為を行ったというより、無錫という都市で自分たちの欲望を満たしてくれそうな品々を徴発しているのである。同様の事例は、12月3日にも書かれている。

二週間余滞在を予想して、設営も厳密に実施し、街へ出かけて、食糧品其の他ノ物品を徴発し、糧食欠乏に備へる。

附近の田畑には菜葉が非常に多く、之の心配は無用だ。

(中略)

本夜は徴発した寝台及夜具で故郷の事を夢見つゝ、楽しい夢路をたどる。(昭和12年12月3日条、丹陽東南方馬象村)

馬象村において長期駐留を予測して、予め糧食の欠乏を防ぐ目的で「食糧品其の他ノ物品」を徴発し、「寝台及夜具」まで徴発し快適な眠りについている。

つまり軍隊として規定された露営や宿営のやり方、糧食をどのように消費するかという規則遵守の観念は霧散し、一定期間駐留を予定した都市や街で、副食物や嗜好品などを揃えた食事を摂り、居心地のいい環境で就寝しようとしているのである。

では、最終目標として一気呵成に進軍した南京ではどうであったのであろうか。

昭和12年12月13日には南京城の大部分を攻略した奥中たちは、翌14日には市内の敗残兵の掃蕩戦に入っている。翌15日の記述に興味深い内容が書き残されている。

十二月十五日

午前八時新しく宿舎をとるべく各隊の設営者は城内に向かった。

先日来我無敵艦隊が続々として揚子江を逆上り偉観を呈し、軍国気分溢れて居る。

一昨日に鹵獲した乗用車及トラックで各隊共徴発だ。夢見る程探し求めた煙草も思ふ存分喫んで、一同は嬉々として居る。

午後三時より各部隊長以上の入城式が行れた。

午後三時三十分、R は把江門外に整列し喇叭の響も高らかに入城する。只、何となく喜び感激の涙は頬を伝って流れ、只、黙々として歩を続けるのみだ。（後略）（昭和12年12月15日条）

奥中たちの部隊は、13日の戦闘中に「鹵獲した乗用車及トラック」を使って、思い思いに部隊ごとに「徴発」を行っている。その目的は、南京市街にふんだんに存在するであろう様々な嗜好品を「徴発」することにあった。そのなかには渴望している「煙草」も含まれていた。本来、煙草は兵站から糧秣として支給される物品であったが、第16師団の兵士たちにはあまり潤沢には支給されていなかった。それが手に入ると嬉々として南京市内に「徴発」に出かける各部隊の兵士たちには、このような「徴発」が略奪行為であるという認識はないようである。午後5時に徴発などを終了し宿舎に帰った奥中は、「今夜は徴発した寝台、温い夜具に包まれて眠」ることを楽しんだようである³⁴⁾。

小原孝太郎の『日中戦争従軍日記』においても、南京市内で徴発を行ったことを書き留めている。輜重隊所属の小原たちは少し遅れて12月19日に南京に到着している。

十二月十九日

九時出発、南京へ。（中略）直ちに馬繋場に這入る。陸軍々営学校だ。唐沢部隊の六ヶ中隊全部集中した。馬繋場を作るとすぐ藁の徴発に行った。具合よう既に藁や切藁が沢山あった。加之に靴や鉄兜やゲートルが散乱してゐた。あわて、逃げたケイセイがある。それから倉庫に這い入ったら襦袢、脚絆、衣、飯盒、水筒、なんでもお望み次第——山の如く積んであるのだ。各中隊の兵が、蟻が砂糖でも引き出すやうに持ち出すは持ち出すは、思い〜に昇いで行く。（後略）（p.138）

十二月二十日

（前略）それから宿舎の近傍へ徴発に出掛けた。（中略）そこに手頃な乳母車があったので持ち出して徴発した。小麦と大麦をそれにのせて帰った。（p.139）

つまり南京市内で「徴発」する際、「手頃な乳母車があったので持ち出し」「小麦と大麦を」「のせて帰っ」ている。このシーンを彷彿させる写真が存在している（図3参照）。

前掲の『支那事変陸軍作戦（1）—昭和13年1月まで—』には、「七日『南京城攻略要領』を指達した」として、南京占領直前の時期に、占領の進め方、掃討についてなどを詳細に決定し部隊に伝達していたことを書いている³⁵⁾。そしてこの『南京城攻略要領』の第7項目として、「七 南京城

34) 『いくさの場』p.56ではこの日の内容を次のように翻刻している。

昨日徴発したトラックを利用して各隊共物資の徴発を行う。さすがは首都南京、あらゆる物資が豊富である。食糧は無論、夢に見る程探し求めた煙草も思う存分喫ことが出来る。

この活字本の翻刻より、『陣中日誌』の原文の方がよりリアルに当時の兵士たちの状況を描いているように感じられる。

35) 前掲注28) 著、pp.427・428。



図3 南京市内で徴発行為をする日本兵

注：『一億人の昭和史 10 不許可写真史』毎日新聞社、1977、p.84 から転載。キャプションに、「12年12月15日 乳母車に荷物をのせて南京市内をいく日本兵 むこうにはロバに荷物をのせた日本兵 東京裁判記録は日本軍将兵の略奪・強姦・虐殺があいついだとするしている。もちろん検閲で不許可」とある。この写真は秦郁彦『南京事件-「虐殺」の構造 増補版』中公新書、2007でも、「略奪品を運ぶ南京市内の日本兵」（『ライフ』1938年1月10日号）として掲載している（p.221）。但し、『ライフ』からの転載としているのは間違いである。『ライフ』1938年1月10日号には当該写真は存在しない。従って、この写真は、1977年に初めて世に出た毎日新聞社の関係者が撮影した写真であった。なお、この写真の初出著書または雑誌については、神戸学院大学付属図書館参考図書係及び国立国会図書館参考図書係の方々のお世話になった。特に記して謝意を表しておく。

ノ攻略及入城ニ関スル注意事項」5項目を全文掲載している。

- (一) 皇軍カ外国ノ首都ニ入城スルハ有史以来ノ盛事ニシテ（中略）各部隊ノ乱入、友軍ノ相撃、不法行為等絶対ニ無カラシムルヲ要ス
- (二) 部隊ノ軍紀風紀ヲ特ニ厳肅ニシ支那軍民ヲシテ皇軍ノ威武ニ敬仰帰服セシメ苟モ名誉ヲ毀損スルカ如キ行為ノ絶無ヲ期スルヲ要ス
- (中略)
- (五) 掠奪行為ヲナシ又不注意ト雖 火ヲ失スルモノハ厳罰ニ処ス 軍隊ト同時ニ多数ノ憲兵、補助憲兵ヲ入城セシメ不法行為ヲ摘発セシム³⁶⁾

36) この「南京城攻略要領」は、アジア歴史センター公開の資料、「第10軍作戦指導に関する参考資料 其3 (2)」C111111743600のなかで見ることができる。「極秘」の押印があり、別筆で「中支那方面軍司令官」と書かれ、「12年12月7日受付 課-参」のスタンプが押してある。

中支那方面軍は、所属師団等に予め南京占領に際して首都・南京を占領するに際しての注意事項を提示し下達していた。第1項や第2項などは当然のこととしても、最後の第5項目は言わずもがなの注意事項とも言える。つまり、中支那方面軍の幹部たちが作成した「要領」のなかで特に、「略奪行為」について「厳罰ニ処ス」と書き、それを防止するために「多数ノ憲兵、補助憲兵ヲ入城」させて「不法行為ヲ摘発」するとしている。

つまり、中支那方面軍は南京占領後に「略奪行為」が多発することを予め予測しその予防策を講じたようである。『支那事変陸軍作戦(1)－昭和13年1月まで－』では「要領」の5項目の「注意事項」を提示しているが、それが厳守されたかどうかなどについてはまったく記載がない。この著書が刊行された1975年段階では南京において多数の略奪・放火・強姦などの不法行為があったことはよく知られている事実であったはずである。しかし、この点についてまったく言及はない。まるで「要領」の5項目の「注意事項」を下達したことによって、そのような不祥事は実在しなかったことを暗に示したかったかのようなようである。

しかし、上述したように歩兵第38聯隊及び輜重兵第16聯隊所属兵士たちは「嬉々として」部隊ごとに「徴発」を行っていた。まるで中支那方面軍が発した「注意事項」など全く知らなかったか無視したかのような行動を取っている。

本節の最後に、南京事件または南京大虐殺として世に喧伝される出来事を奥中はどのように記録しているのだろうか。その点に焦点を当てて分析していく。

『陣中日誌』昭和12年12月13日の記述は次のようになっている。

十二月十三日

敵は十字街南方高地たる紅山に壕を掘り、鉄条網を張り廻らし、二線に陣地を占領して、頑強に抵抗を続けて居る。

我16Dの一部(33i)は紫金山の第一峰を占領し、続いて天文台の高地を攻撃中である。又、荻洲兵団は鎮江から西進し烏龍山砲台を攻撃中である。

柳川兵団の一支隊は、蕪湖に於て揚子江を渡河し、南京対岸浦口に向かって追撃中である。

吉住兵団は南京城東南角に、藤田兵団は南門角に、夫々肉迫して居る。

我支隊は敵の中央を突破して、下関方向に追撃すべく、払暁迄に攻撃準備全く整へ、南京和平門方向に向って前進した。

第一大隊は、左側衛となりて、左第一線、十字街南方高地たる紅山の敵を撃破すべく攻撃を開始した。

敵は迫撃砲及野砲等を有し、山の中復(腹カ)から山頂にかけて壕を掘り、十重二十重に鉄条網を張り廻し、最後の攻撃を試るべく応戦した。然し、今は大勢すでに決し、破竹の勢なる皇軍は之を撃破。一意和平門に迫る。

砲兵陣地からも砲声天地を震して猛撃し、戦車隊も爆音勇ましく追撃を開始した。

紅山よりは南京の城壁がよく見へる。流石に一国の首都だけあって、実に立派なものだ。

この城壁を利用して応戦されては、攻撃も一苦労だろうと思って居ると、第一中隊はBiAと

協力して、和平門を攻撃し、何なく之を奪取し、城壁高く日章旗を翻して万歳を叫んだ。
時に十二月十三日午前十時三十分であった。

我隊は最も堅固なる中央戦線を突破して、終に南京城の一角は占領したのだ。

地下に眠る戦没勇士も嘸かし喜ぶだろう……

引続いて右側衛たる R は下関に向って敗敵を掃蕩しつゝ前進、又、前進をすれば、万余の敗敵は逃げ場を失ひて、右に左に周章狼狽するを撃滅した。

城内獅子山砲台も占領された。尚追撃の手をゆるめぬ皇軍、第三中隊の勇敢なる攻撃によって下関に通ずる把江門を占領、日章旗を翻した時の嬉しさは、筆で現す事が出来得ない。

十二月十三日午後五時三十分、実に記念すべき一刻であった。病院の中隊長殿も喜んでくれるだろう。

愈々南京入城は時間の問題となった。

揚子江岸に敵兵上陸敢行以来、最後の目標たる南京に入城出来得るのだ。

城内外の支那兵も軽度の抵抗を続ける者は、之を撃滅すれば、今は全く戦意なく続々として我軍門に降る者、大隊でも数千名を越へる。

部隊は、明日、城外の掃蕩を準備して、南京下関の熱河路両側に露營す。

夜間も間断なく銃声聞へ、敗敵は続々として殲されて行く。

入城式を夢見つゝ、夢路をたどる。

奥中が書いた 12 月 13 日の記述は、自分も所属する「16D」（第 16 師団）隷下の「33i」（歩兵第 33 聯隊）の攻撃、次いで「荻洲兵团」（荻洲立兵師団長が率いる第 13 師団を中心とした大部隊）、「柳川兵团」（柳川平助司令官のもと第 10 軍）、「吉住兵团」（吉住良輔師団長が率いる第 9 師団を中心とした大部隊）、そして「藤田兵团」（藤田進師団長率いる第 3 師団を中心とした大部隊）の攻撃の様子を書いている。後半は自分も所属する歩兵第 38 聯隊の攻撃の様子を克明に書いている。

まるで、中支那方面軍による南京占領までの総攻撃の有り様を空から俯瞰したような記述になっている。これは、奥中が所属する第 3 中隊指揮班に刻々と伝えられた通報などによって得られた情報をもとに書いたと想像される。

次の日の 12 月 14 日の記述は、奥中自身の目で見る事ができた陥落後の南京城内での掃蕩の様子を書いており、前日の記述とは全く書き様が違っていることがわかる。

12 月 14 日では以下のように書いている。

十二月十四日

R は午前八時集結し、各部隊と共に城内の敗敵を掃蕩すべく城内中山路の十字路に至り待機す——中昼後、掃蕩を開始する。

城内の家屋には至る所敗残兵あれ共、兵は全く戦意なく、我軍門に降る者多し。

四徳（億カ）の民衆の首都、南京も終に我手に占領されたか。近代建築物が軒を並べアスファルトを敷きつめた道路上には、敵の敗退を示すかの様に、兵器被服あらゆる物品が足の踏む所

もない迄に四散し、其の間に敵の死体累々として折重なり、目も当てられぬ様な惨状だ。高射砲機関砲等が天空を擬して置去りにしてあり、あらゆる兵器が打壊かれて四散して居るのも、又、一介の哀を感じる。午後四時予定の如く掃蕩終り、和平門に引上げて休憩の後、昨日の宿舎下関に向ひ昨夜と同じく露營す。

『陣中日誌』のなかでは、掃討戦で捕虜にした敵兵を殺害したといった記述はない。所属する第一「大隊でも数千名を越へる」敵兵を捕虜にしたことを書いている。次の日の掃蕩においても「城内の家屋には至る所敗残兵あれ共、兵は全く戦意なく、我軍門に降る者多し」としており、多数を捕虜にしたことがわかる。但し、『いくさの場』で記憶をもとに加筆したと推測されるような虐殺を行ったような風聞を聞いたというような記述は存在しない。

防衛省防衛研究所所蔵の『昭和十二年十二月十四日 南京城内戦闘詳報 第一二号 歩兵第三十八聯隊』附表第三に、「南京城内戦闘詳報鹵獲表」に第三大隊として、

将校七〇 准士官下士官兵 七一三〇

一、俘虜七、二〇〇ハ 第十中隊堯化門附近ヲ

守備スヘキ命を受け同地ニ在リシガ十四日午前八時三十分頃数千名ノ敵白旗ヲ掲ゲテ前進シ来リ午後一時武装を解除シ南京ニ護送セシモノヲ示ス³⁷⁾

とあり、歩兵第38聯隊が「鹵獲」した捕虜は総数7,200名であり、武装解除して南京へ護送したことを記している。

従って、奥中の『陣中日誌』の記載からは南京事件に関係するような記述は見出すことができなかった。しかし、1994年に奥中が自費出版した『いくさの場』には、記憶に拠ったと推測される虐殺に関係するような記述が加筆されている。（以下、(下)に続く）

37) 「南京城内戦闘詳報 第12号 昭和12年12月14日 歩兵第38連隊」アジア歴史センター、C11111200500として閲覧できる。

『人文学部紀要』第44号正誤表

氏名	水本浩典	
論文名	「支那事変」従軍中に書いた従軍日記『陣中日誌』を読む (上)	
訂正箇所 (頁・行)	誤	正
61頁・7行目 63頁・2行目 63頁・11行目(空白行 を含む)	小原幸太郎 小原幸太郎 小原幸太郎	小原孝太郎 小原孝太郎 小原孝太郎